

世紀の洋時計

この時計は、日本にある西洋の機械式時計の中で最も古いものである。また、16 世紀の時計としては、世界で最も保存状態の良いものの一つである。1609 年、千葉県房総半島の沖合で難破したスペイン人船員を日本の村人が助けた後、スペイン王フェリペ 3 世(1578-1621)が徳川家康公(1542-1616)に感謝の意を込めて贈ったものである。1611 年に来日したスペインの外交官セバスティアン・ビスカイノ(1548-1624)が、国王に代わって家康公にこの時計を贈った。家康公が最も大切にしていたものの一つと考えられている。

この時計がきれいな状態で残っている最大の理由は、使用されることなく保管されていたことである。1872 年まで、日本では昼 12 時間、夜 12 時間で、1 年を通じて時間の長さが変化していた。例えば、夏の日照時間は冬の日照時間よりずっと長い。したがって、同じ長さの時間を表示するこの時計は、日本人にとってあまり使い勝手のよいものではなかった。

家康公はこの時計を受け取った 5 年後に亡くなり、遺品として久能山東照宮に移された。1616 年以来、神社の保管庫で保護されている。

家康公の時計は、ヨーロッパで一般的であった磨耗の修理や技術の進歩に伴う更新が一切行われていない。従来の部品がすべて残っており、歴史的な時計作りを研究するには最適な資料である。2014 年、ロンドンの時計保存修復師であるハン・テン・ヒューブは、久能山東照宮のためにこの時計の実働レプリカを製作した。16 世紀に使われていたであろう手工具を使って、約 1 年かけてレプリカを完成させた。文字盤と時針は純銀製で、手工芸協会の職人が装飾を施した。この時計は久能山東照宮博物館に展示されており、レプリカは毎日巻き上げられ、毎正時に打刻される。

この時計は、正面のプレートにハンス・デ・エバロの名前が刻まれていることから、当初は 1581 年に彼が製作したものと考えられていた。しかし、2014 年に静岡大学が行った X 線撮影を大英博物館に解析され、時計の内部、底部に別の名前があることが判明した。1573 年にブリュッセルでこの時計を製作したのは、ニコラウス・ド・トロエステンベルクであると考えられている。

重要文化財